

課題達成談話におけるアイデア提案時の日本人教師・学生ペアの言語的特徴

—学生同士ペアデータとの比較を通して—

新家 理沙(日本女子大学大学院生)

1. はじめに

提案は、Brown & Levinson(1987)において聞き手のネガティブ・フェイス(縄張り、個人的領分、邪魔されない権利に対する基本的要求)を脅かすフェイス威嚇行為(face-threatening acts, FTA)の1つとして挙げられている。つまり相手に自分の考えを明示する行為であると同時に、自分の考えを押し付けて相手の領域に踏み込み気分を害する危険性を伴う行為であり、「話し手が聞き手との関係性をどのように捉えているか」が提案時の言語形式の選択に大きな影響を与えることが予測される。なかでも話し手・聞き手の親疎関係(年齢や立場の違いの有無)は関係性の捉え方に影響を与える要素の1つと考えられ、日本語母語話者の会話スタイルの在り方に特に大きな影響を与えることが予測されるが(重光, 2017)、協同で1つの目的を達成するための相互行為における提案の際の親疎関係と言語形式の選択の関連性に焦点を当てた研究はこれまでに行われていない。

本研究では、疎の関係である日本語母語話者2者(教師・学生)が自身の母語で行う課題達成談話を取り上げ、提案の際の言語形式の使用傾向を分析した新家(2020)の分析結果を、同条件の親の関係である2者(学生同士)の使用傾向を分析した藤井(2018)の分析結果と比較し、親疎関係と言語形式の選択の関連性を明らかにした上で、教師・学生の言語的特徴と課題達成談話の提案時における関係性の捉え方についての考察を試みる。

2. 先行研究

提案を取り上げた研究はこれまで多くなされているが、日本語母語話者同士の相互行為における提案の研究としては桑原(1996)と鈴木(2003)が挙げられる。

桑原(1996)は、1つの課題について提案する一連の談話の展開過程を「提案行動」とし、話し合いの自然会話データ4種類(展示会の企画会議、学校の学期末会議、教科書の編集会議、結婚式の打ち合わせの電話)から提案行動の部分抽出した上で、構造を「話段」を用いて分析した。分析の結果、提案行動が「要請型」であるか「自発型」であるかにより異なる種類の話段から構成されていることが分かった。桑原(1996)は提案が行われる際に使用される「型」を解明・説明することにとどまっておらず、使用されている言語表現そのものや使用傾向については言及されていない。

一方鈴木(2003)は、日本語の音声教材と映画を言語資料として提案表現²を抽出し、提案する内容に含まれる人物と話し手の立場・役割における関係や提案が行われる場、話し手の提案の内容の捉え方等待遇表現の観点から類型化・考察を行なった。この研究は、提案の言語表現と提案が行われているコンテクスト両方を考慮した研究ではあるものの、言語資料から抽出されている提案の場面が多岐にわたっており、本研究で取り上げる協同で1つの目的を達成するために行われる相互行為内での提案の言語表現に焦点を当てた詳細な研究がなされていない。

3. データ・分析方法

本研究では、教師・学生のペア(以下教師・学生ペア)の課題達成談話データを扱った新家(2020)の分析結果を同条件の学生同士のペア(以下学生同士ペア)のデータを扱った藤井(2018)の分析結果と比較することで、親疎関係と言語形式の選択の関連性の解明を試みる。上記2つの研究では、ミスター・オー・コーパスというデータ・コーパスを使用している。

1 「話段」とは、参加者の目的に応じた発話から形成される内容上のまとまりを指す語である。

2 鈴木(2003)は「提案表現」の定義として「表現主体」がある「前提」のもと、何らかの点でだれかに「利益」があり、「実現」の可能性があると認識した「自分」の考えや意見などを「内容」として、それを「相手」に提示する表現行為)としている。

ミスター・オー・コーパスは異言語・異文化間比較研究のために収集されたデータ・コーパスであり³、(1) 課題達成談話、(2) 1人語り、(3) 会話の3種類で構成されている。実験協力者は女性のみである。社会的人間関係による言語行動への影響を観察することを目的としているため、上下・疎の関係である教師・学生ペアと、同等・親の関係である学生同士ペアの2種類のデータが収集されている。新家(2020)では、(1)課題達成談話の教師・学生ペア、藤井(2018)では学生同士ペアが扱われている。

課題達成談話では、実験協力者2名が15枚のカードを並べ替えてひと続きのストーリーを作る課題を行っている様子が記録されている。本課題は制限時間を設けていない。また課題を行う前に参与者たちにはストーリーには正解がないことを伝えているため、参与者たちは納得のいくまで課題に取り組むことができる。新家(2020)では日本語母語話者13ペア、藤井(2018)では日本語母語話者12ペアのデータが扱われている。データでは、ストーリー作りの手順に関する提案や作り上げたストーリーの確認の提案など様々な提案の場面が見られるが、上記2つの研究ではストーリー展開のアイデアに関する提案の場面のみが分析の対象となっている。分析の際には、データから抽出された提案の際の言語形式に着目し以下の4つに分類した上で、教師・学生ペア時と学生同士ペア時の教師もしくは学生の使用傾向を比較する。

表1 提案の場面で使用される言語形式の分類 (藤井・金, 2014)⁴

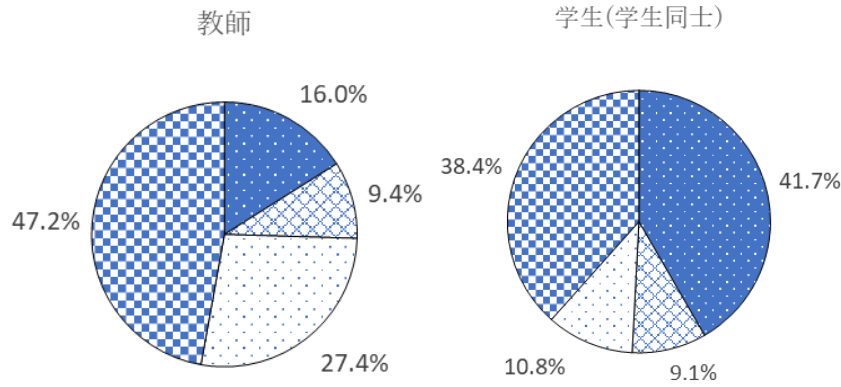
言語表現の種類	使用例
(1) 陳述文 緩和表現等を伴わない平叙文	黄色いのだけ渡れちゃった。
(2) 緩和表現を伴った陳述文 緩和表現を用いた陳述文 (緩和表現は太字)	こいつをつぶしちゃって、 ぶちゅってなっちゃって、 あれ、 みたいな
(3) 陳述形式による疑問文 平叙文でありながら末尾が 上昇イントネーションで終わる文	白いのはずっといる感じ？
(4) (一般形式の) 疑問文 (否定疑問文や付加疑問文等を含む) 疑問文	え、これ絶対、黄色が 白つぶしたんじゃない？

4. 分析結果

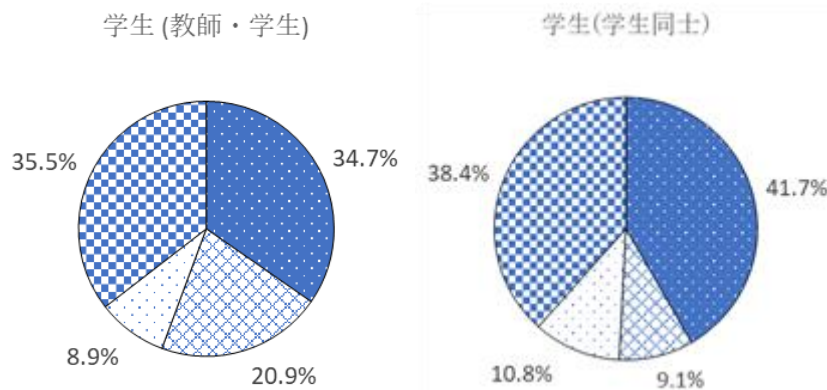
以下図1・2は、教師・学生ペア時と学生同士ペア時の教師もしくは学生の各言語形式の使用頻度の平均値を、新家(2020)と藤井(2018)の分析結果を基にグラフ化したものである。なお、学生(教師・学生)は教師・学生ペア時の学生、学生(学生同士)は学生同士ペア時の学生の各言語形式の使用頻度を示している。

³ ミスター・オー・コーパスは、「アジアの文化・インターアクション・言語の相互関係に関する実証的・理論的研究」(平成15～17年度科学研究費基盤研究B, No. 15320054, 研究者代表 井出祥子), 『母語話者視点』に基づく解放的語用論の展開: 諸言語の談話データの分析を通じて」(平成20～21年度科学研究費基盤研究B, No. 20320064, 研究代表者 藤井洋子), および「社会・文化的場の共創と言語使用: 母語話者視点による語用論理論の構想」(平成23～25年度科学研究費基盤研究B, No. 23320090, 研究代表者 藤井洋子)のもとに、平成16年に日本語とアメリカ英語を、平成18年に韓国語を日本女子大学にて収集。また、平成20年にリビアでリビア・アラビア語を、平成24年にタイでタイ語を収集。平成28年に中国・北京で中国語を収集。すべてはDVDに収録され、文字化されている。

⁴ 新家(2020)は藤井(2018)で示されている分類を基に分析しているが、藤井論文には各言語形式の例文の掲載がないため、同条件の日本語・韓国語・(アメリカ)英語母語話者の学生同士ペアの比較を行っている藤井・金(2014)での説明を著者がまとめたものを載せることとする。



■ (1) 陳述文 □ (2) 緩和表現を伴った陳述文 □ (3) 陳述形式の疑問文 ■ (4) (一般形式の)疑問文
 図1 日本語母語話者の教師・学生ペア時の教師と学生同士ペア時の学生による各言語形式の使用頻度



■ (1) 陳述文 □ (2) 緩和表現を伴った陳述文 □ (3) 陳述形式の疑問文 ■ (4) (一般形式の)疑問文
 図2 日本語母語話者の教師・学生ペア時の学生と学生同士ペア時の学生による各言語形式の使用頻度

藤井(2018 : 134)によると、表1に示した4分類のうち前者2分類((1)陳述文と(2)緩和表現を伴った陳述文)を「聞き手からの反応を要求しない話し手からの発信中心の言語形式」、後者2分類((3)陳述形式の疑問文と(4)疑問文)を「聞き手からの反応を引き出すための言語形式」としている。前者を「非疑問形式」後者を「疑問形式」とラベル付けし上記図1・2を見ると、学生同士ペア時の学生に比べ ①教師の疑問形式の使用頻度の高さ(教師 74.6% vs. 学生ペア時の学生 49.2%)、②学生の(2)緩和表現を伴った陳述文の使用頻度の高さ(教師・学生ペア時の学生 20.9% vs. 学生同士ペア時の学生 9.1%)が顕著であることが分かる。

5. 考察

本研究で分析対象としている4つの言語形式は、(1) 陳述文、(2) 緩和表現を伴った陳述文、(3) 陳述形式による疑問文、(4) (一般形式の) 疑問文の順で直接性が高く(藤井, 2016)、新家(2020)ではこの言語形式の直接性の相関に待遇表現の度合いの相関を加えた、以下図3を示している。



図3 アイデアの提案の言語形式の直接性と待遇度合いの相関 (新家, 2020 : 51)

重光(2017 : 235)において日本語母語話者の会話スタイルは「上下関係を重視しそれぞれが立場をわかまえる」と指摘されている。つまり本研究で扱っているデータにおいては、上下関係の影響が少なく中立・下向きの待遇の言語形式を使用する傾向が高くなると考えられる学生同士ペアの学生に対し、「教師が上、学生が下」という上下関係の影響から、

教師・学生ペアの教師は学生同士ペアの学生と同様中立・下向きの待遇、学生は上向きの待遇の言語形式の使用傾向が高くなることが予想される。しかし実際の分析結果は、教師・学生共に異なる使用傾向が見られた。

本研究で扱っているデータは、参加者2人でひと続きのストーリーを作る課題を行っており、互いがコミュニケーションをとって協力することが必要となっている。つまり課題達成を実現するための協力体制を築くことが重要視されやすい状況が、教師・学生の表現選択に大きな影響を与えていることが推測される。井出(2006)では、対話者の連帯感等の理由でわきまえを気にする必要がなくなり、新しい有標の意味を想像する現象を「わきまへの逸脱」として説明している。本研究のデータの場合、上下関係を重んじて表現を選択することが「わきまえ」であるが、教師・学生共にストーリー作りを共同して行う際に必要となる協力体制の構築を重視したことから、表現選択の傾向の変化が見られたと考えられる。

藤井(2016: 10-11)は、課題達成談話のための相互行為における自己と他者の在り方について「日本人は自己が他者と共鳴し、自他融合的ともいえるような関わりを持ちながら、共に1つの考えを構築していく」と説明している。教師が多用している疑問形式は聞き手からの反応を引き出す形式であることから、教師は学生とのアイデア構築を促す存在として課題達成に参加していると考えられ「共に1つの考えを構築していく」志向が示唆される。一方学生が多用している(2)緩和表現を伴った陳述文は聞き手からの反応を要求せず「話し手からの発信中心の言語形式」であることから、学生はアイデアの発信者として課題達成に関与していると考えられる。一見藤井の述べる自己と他者の在り方から大きく逸脱しているように思えるが、親の関係である学生同士ペア時の学生に比べて(1)陳述文より上向きの待遇寄りの表現である(2)緩和表現の伴った陳述文を多用していることから、アイデアの発信者であると同時に教師の反応のための余白も形式上与えているという点で、学生にも「共に1つの考えを構築していく」志向が見られると考えられる。

6. おわりに

本研究では、疎の関係である2者(教師・学生)が協同で1つの目的を達成するために自身の母語で行う課題達成談話を取り上げた。そして、提案の際の言語形式の使用傾向を分析した新家(2020)の分析結果を、同条件の親の関係である2者(学生同士)の使用傾向を分析した藤井(2018)の分析結果と比較し、親疎関係と言語形式の選択の関連性について分析・考察を試みた。分析の結果、学生同士ペア時の学生に比べ教師の疑問形式の使用頻度の高さと学生の(2)緩和表現を伴った陳述文の使用頻度の高さがそれぞれ見られた。そして、わきまへの逸脱(井出, 2006)や課題達成談話のための相互行為における日本人の自己と他者の在り方(藤井, 2016)を基盤として「アイデア構築の推進者としての教師」と「アイデアの発信者としての学生」という関係性を構築し、課題達成のための提案が行われていることが示唆された。

謝辞 本稿の執筆にあたって藤井洋子氏から分析結果の提供そして有益なコメントを頂いた。ここに感謝する。

参考文献

Brown, P., & Levinson, S. C. (1987 [1978]).

Politeness: Some Universals in Language Usage. Cambridge, MA: Cambridge University Press.

藤井洋子 (2016). 日本人のコミュニケーションにおける自己観と「場」―課題達成談話と人称詞転用の分析より― 藤井洋子・高梨博子(編) シリーズ 文化と言語使用1 コミュニケーションのダイナミズム ―自然発話データから ひつじ書房 pp. 1-37.

藤井洋子 (2018). 「個を基体とする言語行動」と「場を基体とする言語行動」―英語・中国語・日本語・韓国語・タイ語の比較より― 社会言語科学, 21(1), 129-145.

藤井洋子・金明姫 (2014). 課題達成談話における相互行為の言語文化比較―日本語・韓国語・英語の比較分析 井出祥子・藤井洋子(編) 解放的語用論への挑戦―文化・インターアクション・言語 くろしお出版 pp. 57-90.

井出祥子 (2006). わきまへの語用論 大修館書店

桑原和子 (1996). 日本語の「提案」の談話の構造分析 日本女子大学大学院文学研究科紀要, 2, 12-1.

重光由加 (2017). 何を「心地よい」と感じるか 会話のスタイルと異文化間コミュニケーション 井出祥子・平賀正子(編) 講座社会言語科学【第1巻】異文化とコミュニケーション ひつじ書房 pp. 216-237.

新家理沙 (2020). 課題達成談話における提案場面での言語行為―日本語母語話者の教師・学生のやり取りに焦点を当てて― 日本女子大学大学院文学研究科紀要, 27, 54-43.

鈴木由美子 (2003). 待遇表現としての「提案表現」の「提示」類型に関する一考察 早稲田大学日本語教育研究, 2, 121-135.